

# メタセコイア並木に関するお知らせ

森林総合研究所九州支所は、2024年2月までに、メタセコイア並木の一部を伐採します。伐採の理由は高齢化による幹の腐朽で、詳細は以下をご参照下さい。

## メタセコイアとは？

ヒノキ科のメタセコイアは、1941年に三木茂博士によって化石植物から命名されました。その後中国で発見され、「生きている化石」として注目を集めました。日本では公園や街路に植えられ、九州支所の入口にも、1957年に植栽されました。春の新緑や晩秋の紅葉は美しく、市民にも親しまれてきました。



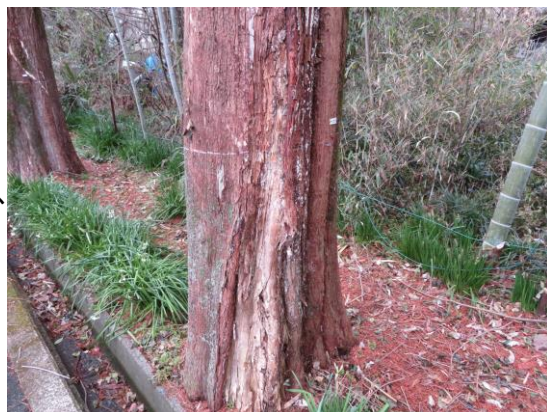
## 並木の現況



メタセコイアは植えて66年たって、直径が80cmを超えるほど大きく成長しています。このような樹木は、台風などで被害が生じることが心配されます。実際に2015年の台風15号では幹折れや枝折れが起きました。そこで、九州支所では断幹や枝の剪定をおこない、大きな被害が発生しないように管理してきました。

## 危険度の診断

前回の断幹・剪定から7年たって、次の対応を検討するため、幹の危険度診断をおこないました。外観からは、一部の木に腐朽や空洞が観察されました。また、裏面に示した機器による幹の腐朽検査の結果、並木の45本のうち、16本は幹の内部に大きな空洞・腐朽が確認され、危険度が高いと診断されました。

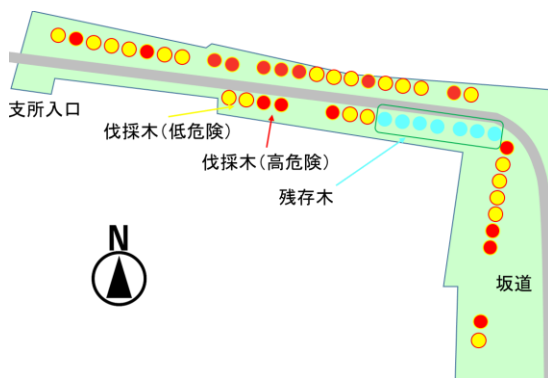


## 幹の腐朽検査

樹木医などは、樹木の幹の内部の空洞や腐朽の状態を調べるため、様々な検査手法を用います。今回はレジ（RESI PD）を用いた貫入抵抗検査と、アーボソニック（Arbor Sonic 3D）を用いた応力波トモグラフィで調べました。外観では健全に見える幹でも、内部に空洞・腐朽しているものも確認されました。



## 対策の検討



メタセコイア並木は、台風などで折れたり倒れたりする可能性が高く、危険な状態と判断されました。現在は植栽木の管理責任が大きく問われます。剪定などで残す手法も検討しましたが、危険度は高くなると考えられ、45本のうち、危険性がある38本を伐採することにしました。健全な7本は断幹・剪定して残します。

## 伐採と再生計画

先人達が大事にしてきたメタセコイアは、伐採後も一部は研究試料として有効に活用する予定です。また、並木の一部は風致地区に指定されており、環境や景観を維持するために新しく並木を再生する予定です。なお、樹種による長所短所を考慮した樹種選定を含め、並木の再生計画を検討しています。



メタセコイアの腐朽に関する情報は、九州支所が発行している『九州の森と林業』146に掲載されています。『九州の森と林業』は九州支所で配布しているほか、HPで公開していますので、興味のある方はご覧ください。



発行・問い合わせ：

国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 九州支所